



## 「ラテンアメリカとアジア太平洋間の貿易関係に関する 国際学術セミナーに参加して」

神戸大学 経済経営研究所  
非常勤研究員 村上 善道

2013年8月21日にチリのサンティアゴに本部を置く、ECLAC (Economic Commission for Latin America and the Caribbean、国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会) にてラテンアメリカとアジア太平洋間の貿易関係に関する国際学術セミナーが行われ、当研究所所長の浜口伸明教授と私の共著論文(“Strategy for Trans-Pacific Integration: from Japanese Perspective”)を報告する機会に恵まれました。今回の学術セミナーは、ALADI (Asociación Latinoamericana de Integración、ラテンアメリカ統合連合)、CAF (Corporación Andina de Fomento、アンデス開発公社) および ECLAC の3者のイニシアティブで2012年に設立された Latin America – Asia-Pacific Observatory (ラテンアメリカーアジア太平洋研究所) の開催した最初の学術セミナーでありました。またこのような国際機関の主催する学術セミナーということもあり、学術機関の研究者だけではなく、各国の政府機関・民間部門の方々も出席されていました。

私は、大学院生として神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程に編入学する前に、ECLAC で5ヶ月ほどのインターンを経験していましたので、私にとっては4年ぶりのチリへの滞在および ECLAC への訪問になりました。ラテンアメリカを研究されている方々以外には残念ながら、ECLAC の認知度・理解は限られているように思いますので、最初に今回の学術セミナーと関連させて ECLAC とその今日的意義に関する簡単な紹介を書きたいと思います。

ECLAC は国際連合の経済社会理事会の下部機関である地域経済委員会の一つとして1948年に設立されました国連のシンクタンクです。なお設立時の名称はカリブ地域を含めない ECLA でしたので、ある世代以上の方は「エクラ」と言った方が通じるようにも思います。またスペイン語では、その頭文字をとって CEPAL (Comisión Económica para América Latina y el Caribe) といい、「セパル」と発音します。日本との関係に触れますと日本は2006年7月に ECLAC の正式加盟国になり、また当神戸大学経済経営研究所は日本の大学附置研究所としては唯一、2007年9月に ECLAC と学術交流協定を締結しています。日本の開発経済学の教科書などでは、「一次産品輸出国の交易条件悪化説による輸出ペシミズム論を論拠に輸入代替工業化を提唱してきた」という点においてのみ、ECLAC が紹介されてい

るようにも思いますが、ECLAC のオピニオン・リーダーとしての役割は 1950 年代および 60 年代の「輸入代替工業化」で終わったわけではなく、時代の変化・状況に応じて斬新的なアイデア、特に国際開発戦略上のキーとなる概念を提唱して来ました。例えば既にこの言葉自体は広く定着していると思いますが、「開かれた地域主義」(open regionalism) も元をたどれば、1994 年の ECLAC の公式出版物“Open regionalism in Latin America and the Caribbean: Economic Integration as a Contribution to Changing Productions Patterns with Social Equity”によって提唱されたものです。“Open”と“Regionalism”、即ち「自由化」とある種の経済ブロックを想起させる「地域主義」を合わせることは何か矛盾する概念を足しているようにも思われるかもしれませんが。しかしその意味するところは、第一に地域全体としてオープンにしていく(貿易自由化を進めていく)ということであり、第二に一定の条件を満たす限りにおいて対象とする地域の概念が開かれているということです。従って、「開かれた地域主義」においては貿易協定の対象はラテンアメリカ地域内のみならず、域外先進国やアジア・太平洋地域をも含むものであることは特記すべきことであるといえます。

実際に ECLAC がその政策策定に一定程度、影響を与えてきたと考えられるチリが、域外先進国との自由貿易協定を積極的に締結し、またチリ、ニュージーランド、シンガポール、ブルネイダルサラームの 4 カ国で締結しました環太平洋戦略的経済連携協定

(Trans-Pacific Strategic Economic Partnership Agreement、いわゆる P-4)をはじめ、チリが韓国、中国、日本を含むアジア・太平洋地域との自由貿易協定をラテンアメリカ諸国の中でもいち早く推進してきたことは興味深い点であると言えます。P-4 は私がここで申し上げるまでもなく、現在、日本が参加をめぐって大きな議論となっている TPP の起源であります。アメリカが交渉参加を表明して以来、本来の原加盟国の意図とは異なる方向で交渉が進んでいるように私には思われます。また今回の学術セミナーも下記で述べますように現在交渉過程にある TPP の経済的効果自体を議論することを目的としたものではありませんので、その点をご承知おきください。

前置きが長くなってしまいましたが、今回の学術セミナーはラテンアメリカとアジア太平洋間での事実上の貿易関係の強化・また前述したような貿易協定による法律上の (*de jure*) 貿易関係の強化を背景に、両地域の貿易、投資、協力関係の「質」をどのように改善していくかということを議論することを目的に行われました。「質」という点を強調しましたのは、現在の ECLAC がかつて主張したとされる輸出ペシミズムとは大きく決別し、貿易に基づく成長を主眼にしていることは確かですが、単に自由化のみを進めればよいとしている訳ではなく、自由貿易の恩恵を社会的公正に結びつけていくための公共政策の役割を重視していることもまた確かです。その関連において、今回の学術セミナーにおける論文募集の説明の中で、ラテンアメリカとアジア太平洋間の貿易関係の強化が、アジアからの製造業輸出を増加させることで、ラテンアメリカの脆弱な製造業に打撃を与える上、中国を中心とするラテンアメリカからの一次産品への需要増が、ラテンアメリカからの輸出における一次産品への集中を強めていることに対するラテンアメリカ側からの憂慮が表

明されてきました。と言いますのは、一次産品に依存する経済は、製造業と比較して雇用創出・技術革新などの点で劣り、分配上の公正を達成する上でも不利と考えられる要因が指摘されてきたからです。このような「一次産品問題」に対する視点も ECLAC が創設以来一貫して持ち続けているものと言えるでしょう。

セミナーの冒頭ではこれらを含め、ECLAC 側からラテンアメリカとアジア太平洋間の貿易関係に関する現状と課題を要約した冒頭スピーチののち、アジア・太平洋側から ESCAP (Economic and Social Commission for Asia and the Pacific、国連アジア太平洋経済社会委員会、ECLAC と同じく前述の地域経済委員会の一つ) および韓国、中国からの研究者からの報告がありました。午後は審査委員会を通過した拙論を含む 9 本のペーパーの報告があり、マレーシアからの研究者と私を除くと、いずれもラテンアメリカ各国からの研究者の報告でありました。大きな印象としましては、それらラテンアメリカ側からの 7 件の報告のうち、ラテンアメリカ各国と中国の貿易関係を扱ったものがそのうち 4 件を占めていたことです。World Integrated Trade Solution (WITS) のデータベースによると 2012 年ではブラジル、チリなどでは中国は輸出先の第 1 位 (それぞれ 17.0%、23.3%) と特に一次産品輸出比率の高い南米諸国で中国との貿易関係が強いことが分かります。このようなラテンアメリカの貿易関係における中国との関係性の強化は、必然的にラテンアメリカ研究者の中での中国への関心の上昇をもたらしていることを実感しました次第です。一方で残念ながら、ラテンアメリカ側から日本との貿易関係をテーマとした論文はありませんでした。以上の状況を鑑みますと、このような国際機関の主催する学術セミナーに日本からの研究者が報告しなければ、海外の研究者の中でまたひいては世界各国の中で、日本の存在感が小さくなりかねませんので、私に報告の機会を与えてくださったことは日本の存在を認識していただくためにも有意義であったものと思います。

セミナーの質疑からは、東アジア諸国が輸出財の工業化を含む多角化、技術開発、人的資本形成などに成功し続けてきたことに対するラテンアメリカ側からの関心の高さが伺えました。ラテンアメリカとアジアが異なる歴史条件、開発戦略、また域内での貿易関係を有してきたことは確かですが、そのようなアジア諸国の経験が、現在のラテンアメリカにおいて適用可能であるかという点がアジアとラテンアメリカの比較研究における重要なトピックであることを改めて認識致しました。一方で私の報告でも指摘させていただいたのですが、ラテンアメリカ域内での市場統合の欠如が、日本にとってもラテンアメリカ地域における戦略を策定することを困難にしているとアジア側からの視点からは考えられます。と言いますのは、現在のラテンアメリカ諸国の地域統合の状況が、ブラジル、アルゼンチン、ベネズエラ、ウルグアイ、パラグアイからなるメルコスールが保護主義的な傾向を強める一方で、メキシコ・チリ・ペルー・コロンビアからなる太平洋同盟 (Alianza del Pacífico) は前述しましたチリに代表されるようにアジア・太平洋地域を含む域外との貿易協定および対外開放を推進していくことの双方に積極的で、ラテンアメリカ地域全体としてどのように地域統合を進めていくかということに関する方向性が現時点では見えていないからで

す。ALADIに関する紹介は、これ以上紙幅の制約で書くことができませんでしたが、ALADIはその両者を含むラテンアメリカ・カリブ地域ほぼ全域が加盟する地域連合であり、その点においてALADIのリーダーシップが期待されると考えられます。その点に関して、ラテンアメリカ側からのより踏み込んだ見解を伺いたかったというのが私の個人的な感想です。

最後に、4年ぶりとなりましたチリ滞在の感想を少しだけ書きます。チリに関しても、日本の多くの方はよくも悪くもイメージがないかもしれません。チリは確かに日本から見れば地球の裏側に位置し、「遠い」ことは確かです。直行便もなく、トランジット待ちと飛行機内での移動時間だけで30時間以上かかるというのは非常に高い移動コストであることは否定しようがありません。しかしサンティアゴ自体は住みやすい町であり、ECLACと滞在先だけを往復していると、自分が地球の裏側にいるという感覚をあまり感じない印象を受けました。勿論、ECLACがある地域は首都サンティアゴの中でも最も富裕な地区（comuna）ですので、私の経験を過度に一般化するべきではないことは承知しています。私自身はこれが3回目のチリ滞在なのですが、なぜか毎度私の人生の岐路で自分の進む方向を与えてくれるチリという国に感謝するとともに、私ども研究者がまず率先してこのような現地で行われる国際会議に出て行く大切さを今回改めて学ばせていただいた次第です。